

参考

教育と研究を両輪とする大学教育の在り方について  
中央教育審議会大学分科会でのこれまでの主な御意見

【大学における「教育」と「研究」】

- 教育と研究の両輪という観点は重要である。特に「研究に基づく教育」が大学教育の原点であり、そのためにも教員力が最終的に非常に重要である。プレFDの説明もあったが、大学教員の教育力を高めるために国も積極的に支援すべきではないか。
  
- 教育と研究の両輪とあるが、もう一つ社会的実践という第3の輪が含まれているのが実態である。これからは、教育と研究と社会的実践というトライアングルの構造をどのように大学教育の中で実現していくかということが新たな大学のシステム作りの課題になるのではないかと考えている。
  
- 教員にとっても、学生との議論を徹底することで、教育と研究の橋渡しになると考えている。一方的に自分が考えた構造の講義のシリーズを話すような授業では、ほとんど質問も返ってこないし、オフィスアワーを設けたとしてもきちんと議論に来る学生もほとんどいない。そのような授業はやめて、毎回毎回その場でいろいろな議論をし合うということの中で、教員も教育の時間にいろいろな研究のアイデアも伝えられるし、思いつきもするし、その中から研究の新しい方向とかを学生と一緒に築いていけるのではないかと考えている。
  
- 学生の教育活動と研究活動を考える際には、就職活動が影響を与えるということも考慮することが必要ではないか。特に修士課程と学士課程において影響が大きいと考えている。

【教育と研究に基づく大学教育の在り方】

(教育課程)

- 大学の学士課程、修士課程、博士課程とあるが、それぞれで養成する人材像や方法論というものは異なるのではないか。博士課程については「教育」と「研究」がイコールという側面もあるが、学士課程ではどうか、修士課程ではどうか、それぞれを分けて考えることが必要ではないか。
  
- 個々の講義についてと同様に、学位プログラムとか、1つの教育プログラム全体においても、それを支える教員のチームが団結しないと体系的なものにはならないのではないか。大学教員の在り方ということについて、個々の教

員にフォーカスするだけではなく、もう少し、その周りにどうチームを作るかという観点も入れるべきではないかと考えている。

- 学部1～3年生までの教育が非常に大切であるが、授業がつまらないという学生の声も聞こえてくる。教育カリキュラム、一つ一つの授業科目のクオリティが重要であり、例えば、一つの授業科目を複数教員が担当し、年度交代で担当し、相互チェックを通してブラッシュアップを図るということも考えていかなければならない。
- 体系的かつ段階的な履修制度ということで、是非ともナンバリングをもっと日本の大学で取り入れることが必要だと考えている。国立大学はかなり増えているようであるが、多くの大学では勝手なナンバリングとなっており、国際的な通用性が余りないのではないかと考えている。
- 今の学生はすごく真面目という印象を持っているが、学生の学習時間の統計などを見ると、欧米の学生と比べて授業時間外の学習時間が少ないと言われているが、実は授業時間数が多すぎてという話も聞こえてくる。以前から授業時間数が多いと言われているが、なぜ今まで履修科目数を減らすということが浸透しなかったのか疑問である。
- これから学生に考える力を育てなければいけないという中で、履修科目数が多く単位が細切れになっていることによって、どうしても知識偏重になってしまう弊害は何とかしたいと思っている。集中的な講義が行えるよう積極的に考えていきたい。
- 履修科目数を減らすことは総論として賛同されるが、現在の履修カリキュラムや仕組みを変えるには相当のエネルギーが必要であり、学内での面倒な調整が必要になるため、変えることは難しいという声が大半ではないか。しかし、実際にはセメスター制からクォーター制への転換などを上手く設計すれば実現可能であり、決断すればできるものであると考えている。
- 研究として博士学位論文をまとめる苦労はあるが、幅広い教育プログラムで学ぶことにより、自分の研究分野以外の専門知識を備えることできたという側面もある。
- 地方創生、リカレント教育という観点から、首都圏の社会人が地域の企業でインターンシップを行うなど、地域の大学が教育プログラムを構築し、人材育成に寄与している好事例がある。このような地方創生に資する取り組みを広げていただきたい。

### (教育内容・方法)

- 学部1年から3年の教育が一番重要であると考えている。その後、研究を通じた本格的な教育につながるという意味では、そこに至るまでの1年から3年の間にどれだけの基礎をつけるかということ、人間としての幅とか、そういったものをつけるかということが重要であると考えている。
  
- 学部1年から3年の間にリベラルアーツであるとか、志の育成であるとか、短期の留学とかいろいろな経験をさせながら、自分の目標を立てさせるということが理想である。例えば、学部1年を対象とした授業科目において魅力的な授業を行う教員を配置することなどを通して、いかに学生の目が輝く世界へ誘導するかということが重要であると考えている。
  
- 大学での学びは高校までのやり方と全然違うということ、学部1年のときに十分に目を開かせないといけない。そのためには、履修科目数を減らして一方通行の講義というものをどんどん減らしていき、ゼミのような討論とレポートをたくさん取り入れる。そこで、学生に文章をたくさん書かせて、教員はその文章について添削して討論するということの繰り返しを行っていくべきだと考えている。
  
- 学部1年から、どんどんグループワークで発言し、自分の意見や批判的な考え方を持つとか、そういったことを通したコミュニケーションスキル、グループワークを通して自分の考えをしっかりと持つというようなことを始めることで、高校での学びとは全然違うやり方なんだということを理解し、大学で何を学ぼうかということを考え始めるのではないかと考えている。
  
- 学生に対して、考えるというのはどういうことか、思考して批判的に考えて、意見を形成して、意見を述べて、意見を戦わせるということがどういうことかということ、授業の中でも毎回毎回それを繰り返していくことが重要である。そういう姿勢というものを身につけた上で、更に新しいことを自分で考え出すことができるというのが大学院の担う部分なのではないかと考えている。
  
- 学士課程におけるゼミや研究室配属による演習・課題解決型教育や卒業論文の作成は、学生が研究課題に取り組むといった我が国固有の教育と研究を体現する教育方法であると考えている。

### (文理の区分を超えた教育)

- 大学段階はもとより、高校段階から文系、理系に分かれて学ぶことが本当に良いことなのか。大学入試の問題もあるが、初等中等教育段階から一緒に

議論する場は大切だと考えている。

- 文系、理系に分かれないというメッセージは非常に大切であるが、新たな入試改革が進む中で文理融合は簡単なことではない。女子学生を含め幅広い理系人材が増えてほしいし、文系を選ぶと将来ビジョンが見えにくいという課題も見えてくる中で、どのように文系、理系を捉えていくのかを意識していかなければならない。
- 企業の観点から、採用時において、文系とか理系とかで区別することはなくなっている。文理融合は賛成だが、いくら知識が豊富であっても人間力がなければ意味がない。社会、企業、大学において「人間力」を備える必要性について触れていくことも必要ではないか。
- 文理融合というワードが出されているが、むしろ、文理複眼というか、理系には理系の優れた考え方があり、文系には文系の優れた考え方があり、文理をどう組み合わせていくかということがとても重要であると考えている。

### 【大学教員の在り方】

#### （大学教員にかかる期待）

- 現在の仕組みでは、大学の制度疲労を越えているのではないかと。教職員も会議、コンプライアンス、様々な評価などに大変疲弊している。教員も学生も授業科目数が多くて疲弊しているのではないかと。疲労困憊している大学は魅力的とは言えないし、大学教員はすごく魅力的な仕事なんだと学生が実感するような形に展開していくこと、大学の魅力再生が特に必要だと考えている。
- 学生はよく教員を見ており、教員が会議であるとかいろいろなマネジメントに慌ただしくしていて、学生とゆっくり向き合い、腰を据えて研究できていない姿というのを見られてしまうと、やはり大学院進学の意欲がかなり減退するというとも感じている。
- 大学教員の在り方の話のところではいろいろ議論があり、履修科目の大幅削減という話を実行しようとする、1人の教員が努力するだけでは不可能であり、それを支えるチームティーチングとか、それがすごく重要ではないかと考えている。
- 教員の教育力を高める観点から、科目数の大幅な削減とチームティーチングの戦略的な導入が必要であると考えている。

### **(大学教員の育成と採用)**

- 米国の例にあるようなT Aの役割、例えば、少人数の討論クラスのコーディネーター、学生の小レポートへの丁寧な指導、教員と一緒に授業設計を行うなど、T Aの組織的なトレーニングという制度が重要である。
- T Aを教育の初期キャリアとして業績を適切に評価する。その評価をアカデミックトラックの初期の段階にしていくことも必要ではないか。

### **(教育支援と研究支援)**

- 大学教員の研究専念時間確保と表裏一体なこととして、大学院生の主体的な教育研究時間を確保すべきであり、大学院生が研究室の研究を支える歯車として使われていることは問題である。ポスドクや研究支援補助者を配置することで、大学院生が十分な研究能力を身に付ける教育を提供することに繋がる。

## **【大学運営マネジメント】**

### **(時間マネジメントの意識改革)**

- 教育と研究を両輪とする高等教育を考えた場合、やはり教員の有限な時間のマネジメントということが決定的に重要だと考えている。学部教育は非常に重要であるが、教員の立場から見ると、現実的に忙しすぎて授業準備の時間も十分に確保できないという実感があるのではないか。
- 教員の有限な時間をマネジメントする。これを転換していくための一つの手段として履修科目数の大幅な削減が必要ではないかと考えている。米国では1科目当たり4単位から6単位が大半であるが、日本では1科目当たり2単位、場合によっては1単位というものもある。科目を細分化しすぎており、科目過多になっているのではないか。科目数が多いことによりシラバスの作成を含めて教員の負担感が増していると考えている。
- 時間のマネジメントについては、教職員として関心があるところであって、アンケート等で見える化していかなければと考えている。実は、会議であるとか教育改革自体であるとか、いろいろな評価に対応する書類作りであるとか、細かい諸々の業務をトータルすると、教育研究以外のものに実はかなりの時間を費やしているのではないか。その実態を是非とも明らかにして、マネジメント改革をしていくことが必要だと考えている。

### **(管理運営業務のマネジメント)**

- 大学教員が教育と研究を十分に取り組むためには、教員側にどのような負

担があるのかというきちっとした実態調査が必要ではないかと考えている。大学教員の時間のエビデンスが示されているが、その業務の具体的な内容についても把握することが重要なのではないかと考えている。大学教員の業務に、会議とか、入試とか、事務的な業務とか、いろいろなものが含まれており、そのエビデンスがあれば更に議論が深まるのではないかと考えている。

- 複数大学の教職員にアンケートをしたところ、外部資金獲得のための作業、社会貢献事業等、対外的アピールのほか、様々な方法・時期に行われる入試、学生募集への対応、新規事業や組織改編への対応業務などが非常に増加をしてきている。しかしながら、人員に余裕がないといった声が多くあがっている。
- 大学などの高等教育機関における教育研究の土台が崩れてしまわないよう高等教育機関で働く教職員の働き方改革がどのように進められているのか、また職場の実態はどうなっているのかなどについてしっかり調査をしていただいて、基盤の整備をしていただくことをお願いしたい。